

「甲子園への遺言」

（ 門田隆将 著 講談社 ）

本書は、30年間プロ野球のコーチとして活躍した高嶋導宏さんの生涯を語っている本です。（2008年にはNHK『フルスイング』でドラマ化されています。）

経歴は、昭和19年岡山県生まれ、岡山南高校～丸善石油～中央大学～日鉱日立を経て、並外れた長打力を誇る即戦力のプロ野球選手と期待されて南海ホークスに入団しました。しかし、入団1年目に怪我をしたためにわずか5年で引退することになってしまったのです。その後、打撃コーチとしてイチロー選手など何人もの名プレイヤーを育て上げてきました。また、50代でコーチを務めながら大学の通信教育で学び、58歳で社会科の教員免許を取得しました。「高校生に野球を指導して甲子園で優勝する」という夢を抱いて福岡県の私立高校に赴任したのだが、膵臓ガンによって教員生活にピリオドを打つことになってしまい、夢が果たせぬままに終わってしまったという話です。

この本を通して、高嶋さんの人柄の良さや野球に対する見方や考え方を知ることができます。引退後すぐに28歳でコーチに抜擢されるわけですが、その指導の仕方や選手に対して親身に情熱的に接する姿勢は見習うものが多くありました。また、球界きってのアイディアマンと称され、様々な練習方法を編み出す引き出しの多さには羨ましささえ感じます。高嶋さんの指導法としては、『とにかく選手をほめる。ほめてほめてほめまくる。たとえたくさん欠点が目についても、その選手のよさを探し出してほめまくるのだ。短所を直すより先に長所を伸ばし、そして気がつくといつの間にか欠点が克服されている。それが、高嶋の指導法だ。』とあります。なかなかできそうでできないことだと思います。教員としての高嶋さんも、期間は短いですが生徒や先生方との関わり方が上手だったのだなと感じました。それ以外にも、当時のプロ野球の裏側も語られており、「野村克也監督解任騒動」や「スパイ合戦」など興味深いものがたくさんありました。

この本を読み終えて感じることは、もし高嶋さんに怪我がなかったらどのような選手になっていただろうか、もし病気にならず高校教員を続けていたらどんな先生だったか、そういう思いを抱かせるような本かなと思います。

私は教員として、また高校野球の指導者としてまだまだ知識も経験も浅いですが、生徒一人一人が成長していく姿や輝いている姿を見ると、とても嬉しくなります。もっともっと生徒が輝けるように、私自身も努力していきたいと思っています。